

淡路国風土記散歩2

淡路の渡来関連遺跡を歩く(中)

寺岡洋

江善寺・高麗陣討死衆供養碑

雨流遺跡から少し北になる、三原川沿いの松帆江尻の江善寺（こうぜんじ）境内には、文禄元年七月七日、閑山島沖の海戦で死亡した水手（かこ）30名の法名を記した碑が残る。渡来関連遺跡ではないが、日本・朝鮮の交流を具体的に語る碑文である。碑文は読みにくい箇所もあるが、釈文を持っておればおよそ確認できる（武藤 誠『兵庫県の古社寺と遺跡』古稀記念会 1977）。

碑中央に南無阿弥陀佛、上段に弥陀三尊の梵字、下段に蓮華、そして左右に15名ずつ「某々禪門」と名が刻まれる。蓮華の右と左側には、それぞれ石碑の名称になった、「文禄元」「高麗陣 敬」、「討死衆 白」「七月七日」が見られる。

建立目的や年月日が記された稀に見る碑文で、兵庫県指定文化財。江善寺は道路脇にあるが、たどり着くには何度か道を尋ねなければ難しい。『むくげ通信』（168号 1998年）にも紹介されている。

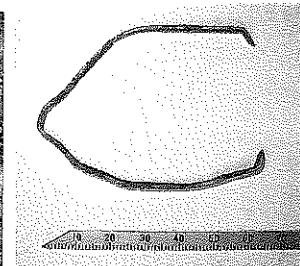
閑山島海戦 脇坂安治 李舜臣 倭城

1592年7月7日、淡路・洲本城主であった脇坂指揮下の水軍と李舜臣麾下の朝鮮水軍が閑山島沖で戦闘に入り、海戦は朝鮮水軍の大勝利としてよく知られる。「大船の内三艘、目くら船、鉄にて要害」と有名な亀甲船も登場する（北島万次『豊臣秀吉の朝鮮侵略』吉川弘文館 1995）。組織的に訓練された朝鮮水軍と、烏合の水軍が土地勘のない場所で戦えはどうなるかを示す例である。

大打撃を受けた豊臣政権はこれ以降、朝鮮水軍と正面から鬭うのを避け、陸上の拠点（初期倭城）づくりと朝鮮水軍の補給地漬しに作戦を変更する。当時の水軍は近辺に補給・休養のための兵站基地なしには鬭えなかった。閑山島海戦は今も残る倭城築城の契機ともなった海戦でもある（『倭城の研究 特集：巨済島の倭城』創刊号 城郭談話会 1997）。



毛抜形鉄製品 木戸原遺跡出土



毛抜形銅製品

平松遺跡出土

蛇足だが、脇坂安治が帰陣の後に築城した洲本城は、海岸の丘陵から湊を囲い込む縄張りが朝鮮半島の倭城の立地や構造に酷似すると言われている。

朝鮮渡来の文物 連行された女性

淡路からは洲本城主・脇坂と志知城主・加藤嘉明が朝鮮に出兵しており、江善寺とその周辺には朝鮮と関連する文物が散見され、さらに、江戸時代の地志類（『淡路常盤草』『淡路草』など）にかなり記載が見られる。人も連行している。

以下は尹達世さんの世界ですが、『四百年の長い道』（リーブル出版 2003）にも見当たらないので、武田信一氏の孫引きで紹介します（「淡路島の中の韓文化」『韓国文化』韓国文化院 1983.1.1）。

江善寺には朝鮮渡来の薬師画像・涅槃画像が所蔵されており、かつては井戸茶碗と鉢もあった。春日寺（南あわじ市阿那賀）の涅槃画像は今も涅槃会にはこれを掛ける。『淡路草』志知北村の項には「相伝ふ、此處に朝鮮陣生捕の一人を置ありし所也と、……生捕の者は耳に大なる穴ありしと云」とか、「…朝鮮から耳に瓔珞（ようらく）をつけた身分の高い女子一人を連れ帰り、……弟の養子にした」など、その他いくつかの話が紹介されている。

幡多遺跡・神本駅 淡路国分寺・国分尼寺

幡多（はた）遺跡 神本駅家（みわもとうまや）

江善寺から南へ国分寺（跡）へ向う途中、幡多遺跡の傍らを走る。三原川右岸・成相川左岸は『和名抄』に記される三原郡幡多郷の比定地で、秦氏の集住と関連すると考えられている。圃場整理による調査が行なわれている（『三原郡埋蔵文化財発掘調査年報』I 三原郡広域事務組合 2001、『古代のみはらー最近の発掘調査を中心にー』三原郡広域事

務組合 2004)。

幡多遺跡若宮地区（榎列上幡多）では、7世紀初頭頃の韓式系土器の模倣甕・長胴甕などが出土している（定松佳重・谷口梢「南あわじ市出土の韓式系土器について」『韓式系土器研究』IX 2006）。

行當地（きょうとうち）地区では奈良時代前半の「家」と書かれた墨書き土器、転用硯2点が出土した。野水地区では、7世紀後半～8世紀初頭の「物」と刻書された甕の破片、円面硯、7世紀中頃（飛鳥時代）と推定される大型掘立柱建物が確認された。9～10世紀頃まで下るが、やはり刻書き土器、縁釉陶器が出土しており、一般集落ではない。

幡多遺跡の西には神本寺（じんほんじ）という寺があり、南海道の神本駅家に由来するとされる。幡多遺跡は出土遺物・遺構からみて官衙施設と考えられ、駅家の付属施設である可能性が高いようだ。

駅家と秦氏集団あるいは渡来系集団が関わる例は、播磨飴磨（しかも）郡巨智（こち）里の草上（くさかみ）駅家と己知（巨智）氏があり、赤穂郡の駅家も秦氏が関わったと推測できる。摂津の葦屋駅家推定地では東漢氏（やまとあやし）一族の葦屋惊人（あしやのくらひと）が木簡で確認されている。

最近、成相川右岸の戒壇寺跡が調査され、志筑庵寺とならぶ白鳳期の寺院であることが確認されているそうで、秦氏とも関連し注目される。

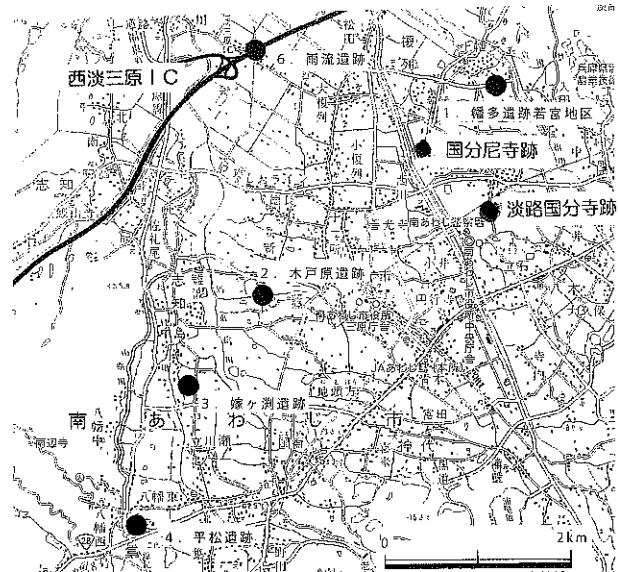
淡路ミヤケ

『日本書紀』仲哀紀には「淡路屯倉（みやけ）」が記される。三原川の左岸、榎列（えなみ）大榎列地区には屯倉神社跡があり、周辺に淡路屯倉があったと推定されている（雨流遺跡の南一帯）。ミヤケの遺構と確実に確認された調査例は見当たらないが、「家」は「ヤケ」と読んでおり、「家」と書かれた墨書き土器は注目される。ミヤケの施設が後代に官衙として引き継がれることも想定できる。

淡路国分寺 国分遺跡（瓦窯跡）

幡多遺跡の1kmばかり南に国分寺が現在も法灯を維持しており、目標になる。寺域は東西の築地塀跡や築地を囲む南北の溝が確認されており、東西一町半（約171m）、南北二町（約218m）と推定され、南北の町道は敷地内を縦断している。

門に入ったすぐ右手に大日堂があり心礎と礎石が残るがすべて動いている。旧本堂跡が金堂跡と推



定され、伽藍配置は紀伊国分寺と類似する。軒丸瓦・軒平瓦のうち、興福寺式とよばれる一群は紀伊国分寺と範（瓦の文様の型）が同じで、南海道を通じた紀伊国と関係が深かったようである。

国分遺跡は国分寺の東に接する窯跡と工房。役人のベルトの装飾である石帶（せきたい）が出土した。

淡路国分尼寺

幡多遺跡と国分寺の間の三原川右岸に国分尼寺跡（稻荷神社周辺）が残る。境内で瓦が拾われており、小字名が尼寺（あまでら）である。調査により版築状の整地層、東西の溝が確認された。

伽藍配置は不明だが、寺域は東西一町（約105m）。国分寺と同方位で五町（約52.5m）の間隔を置いて建てられおり、計画的な土地利用がうかがえる。国分寺と同じ唐草文軒平瓦が出土している。

木戸原遺跡（南あわじ市市新）

淡路島の西南部、三原川流域に位置する雨流遺跡の存在から、5～6世紀代、淡路に有力な渡来系集団の移住が考えられたが、それを決定的にしたのが木戸原（きどはら）遺跡の調査といえる。

「ひょうごの遺跡」に掲載された、鉄錠（てつじゆ）、刀子、小形素文鏡のカラー写真を見たときは、「淡路にこんなもんが出るんや、出作（しゅっさく）遺跡と同じや」と驚いた。出作遺跡（愛媛県松前町）は松山平野の重信川流域にあり、大規模な祭祀・鍛冶関連遺跡として知られ、「出作・市場型須恵器」と

仮称される初期須恵器は、西岡本遺跡（神戸市東灘区）でも出土している（寺岡「渡来関連遺跡を歩く 芦屋川から住吉川」『むくげ通信』211 2005）。

木戸原遺跡の位置は、雨流遺跡から南に3km強。報告書は準備中とのことで、現状での概略を紹介したい（「木戸原遺跡 現地説明会資料」南あわじ市教委 2005、「ひょうごの遺跡」60号 兵庫県教委 2006、前記『韓式系土器研究』IX）。

調査により竪穴住居3棟、掘立柱建物3棟（柵列を伴う建物など、調査例は大幅に増加する由）、土坑などが確認された。大型建物も含まれ、古墳時代、政治的な拠点集落であったと評価されている。

竪穴住居からは滑石で作られた臼玉・勾玉・管玉など祭祀具、初期須恵器（5世紀前半）が出土した。ちなみに、雨流遺跡でも祭祀具の子持勾玉や滑石製模造品が出土している。

韓式系土器の甕など、日常生活に使う土器も出土しており、渡来系集団の居住が確認される。

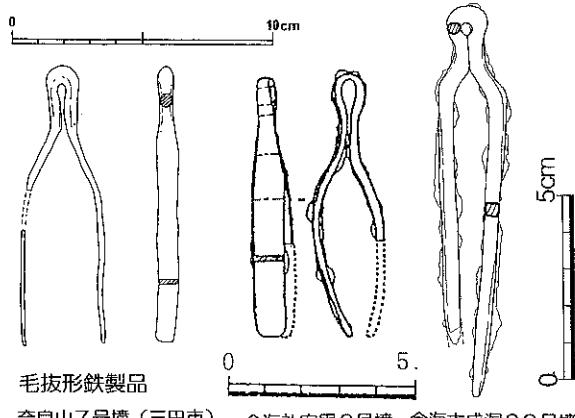
毛抜形鉄製品

滑石製品の集中出土地区にある土坑から写真のような特異なピンセット状をした「毛抜形鉄製品」が出土した。大きさは数センチぐらいか。吉田和彦氏による集成があり（『毛抜形鉄器』の機能・用途認定に向けての基礎的研究（1）』『史学論叢』別府大学史学研究会 2001）、刀剣の佩用金具ではないかと推測されている。

集成から抜けているが、三田盆地の奈良山7号墳の埋葬施設2でも出土しており、報告書では用途を毛抜き・鑷子（じょうし）とされる。長さ10.6cm。古墳の築造年代は6世紀前半～中頃（『北摂ニュータウン内 遺跡調査報告書 I』三田市教委 1983）。奈良山7号墳の被葬者は、金銅冠を副葬する西山6号墳などと同世代の、渡来系吉士（きし）集団の第一世代の人物と考えられる。

近畿地方では数例の出土例が集成されており、寺口忍海古墳群（奈良県）で2点見られる。渡来系鍛冶集団の墳墓群であり注目される。

朝鮮半島では、金海・大成洞29号墳から鉄鉗（ハサミ）とされる2点、14・18号からそれぞれ1点出土例がある（『金海大成洞古墳群 I』慶星大学校博物館 2000）。金海・礼安里2号墳では、鉄鑷とされる1点が知られる（『金海礼安里古墳群 I』釜山大学校博物館 1985）。



奈良山7号墳（三田市） 金海礼安里2号墳 金海大成洞29号墳

木戸原遺跡の毛抜形鉄製品が鍛冶集団でもある雨流遺跡で作られたか、朝鮮半島から持ち込まれたのか不明であるが、いずれにせよ渡来系集団と密接に関連する遺物と考えられる。

雨流遺跡と木戸原遺跡の遺構・遺物を見ると、このような遺跡を『日本書紀』では淡路ミヤケと称したのではないか、とも考えられる。

三原川流域の渡来関連遺跡

嫁ヶ渕（よめがぶち）遺跡 三原郡衙関連施設

木戸原遺跡から南へ1km強、大日川右岸の下水処理場の傍らに遺跡の説明版が立つ。掘立柱建物跡15棟が確認され、うち13棟は8世紀前半ころの三原郡衙関連の建物跡になる。塩の集散に関わったらしい。川を下ると国府の津である湊地区に出る。蹄脚円面鏡も出土している。「周辺からの流れ込み」とされる韓式系土器が出土した。

毛抜形銅製品 平松遺跡

嫁ヶ渕遺跡からさらに1.5kmばかり南になる。墨書き土器や硯も出土し、官衙的性格をもつ遺跡である。旧河道から堰状遺構と共に壺・甕・高杯などが完型で出土しており、水に関する祭祀も行われたようだ。この遺跡でも遺物包含層から韓式系土器が出土し、年代は5世紀前半～中葉とされる。

特筆されるのは、ここでは銅製の毛抜形製品が出土したことである。写真で見るよう頭部の形が異なるが、毛抜形製品に分類される。

鉄と銅という素材を異にする毛抜形製品が近隣の遺跡から出土するのは、ふたつの遺跡は同一集団が関わるもので、また、毛抜形製品に日須から馴染んでいた集団なのであろう。